様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０１６４

研究課題名（和文）モダニズムの人形劇ルネサンス－ドイツ語圏を中心に

研究課題名（英文）The renaissance of puppetry in modernism

研究代表者
山口　庸子（Yamaguchi, Yoko）

名古屋大学・国際言語文化研究科・准教授

研究者番号：００２７３２０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の主たる目的は、モダニズムの人形劇のルネサンスに大きな役割を果たしたエドワード・ゴードン・クレイグ、および彼と密接な繋がりのあるドイツ語圏を中心に考察することであった。そのため、国内外の図書館・資料館等で調査を行い、貴重な資料を入手することができた。調査の過程で、日本、ヨーロッパ、アメリカ合衆国にまたがる、モダニズムの芸術家のネットワークの存在が明らかになった。また特にクレイグの人形劇の概念と日本の文楽の間に、まったく予想外の相互的影響関係があることがわかってきた。この問題に関して、日本語及び英語で複数の査読付き論文を発表することができた(掲載決定分も含む)

研究成果の概要（英文）：The main purpose of this research is to focus on the activity of Edward Gordon Craig who played a major role for renaissance of puppetry in modernism especially in the German-speaking countries, which were closely connected with him. Valuable materials could be obtained by investigations at domestic and foreign libraries and archives. In the process of the investigation I uncovered complex networks of modernism spanning Japan, Europe and the United States. I found also an entirely unexpected mutual influence between Craig's concept on puppetry and Japanese bunraku. In relation with this topic, peer-reviewed papers in both English and Japanese have been published or accepted.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：エドワード・ゴードン・クレイグ　人形劇　モダニズム　文化接触　身体文化　野口米次郎　坪内士行　文楽

１．研究開始当初の背景

モダニズムにおける身体を研究する過程で、申請者は、人形的身体への社会的注目を背景として、「人形劇ルネサンス」と呼ばれるような現象が存在することに気づいた。そこで、平成 23 年度から平成 25 年度まで、科学研究費補助金による研究「『超マリオネット』論再考―演劇改革・舞踊革命・人形劇ルネサンスの接点」（基盤研究 C）を行った。この研究では、エドワード・ゴードン・クレイグの「超マリオネット」の構想を、演劇改革、舞踊革命、人形劇ルネサンス、という三つのパラダイム変換の接点として身体史の観点から考察した。

その結果、機械化・規律化・抽象化された身体を希求するドイツ語圏の新しい身体文化を背景として、クレイグの「超マリオネット」の概念と、演劇改革・舞踊革命及び「人形劇ルネサンス」に密接な関連があることがあきらかになった。また、ダンカン、フラー、カンディンスキー、シュレンマー、メイエルホリド、ピスカートア、およびメンゼンディーク体操など同時代の身体文化との関係も明らかにすることができた。また、機械化・規律化・抽象化された身体を希求するバウハウスなどに見られる新しい身体文化が、一見疎遠に見える、世紀転換期以来の芸術家コロニーと深いつながりを持っていることも明らかになってきた。

この研究成果から、モダニズムにおける人形的身体への注目には、資本主義社会の発展による「人間」像の不安定化、という歴史的・社会的・文化的な背景があること、それゆえモダニズムの演劇改革・舞踊革命・人形劇ルネサンスは密接な関連を持つこと、クレイグが、人形劇を再評価したことが、モダニズムの人形劇ルネサンスに大きな役割を果たしたことが明らかになった。しかしながら、クレイグの人形劇に対する貢献の全体像、および、モダニズムにおける人形劇ルネサンスの全貌についてはまだよくわかっていないのが実情である。

２．研究の目的

20 世紀演劇の旗手エドワード・ゴードン・クレイグの「超マリオネット」の概念に関する研究から、モダニズムの演劇改革・舞踊革命・人形劇ルネサンスが身体史的に密接な関連を持ち、その歴史的・社会的背景として「人間」像の不安定化があることが明らかになった。この研究を発展させ、モダニズムの「人形劇ルネサンス」に焦点を当てて、クレイグと密接な繋がりのあるドイツ語圏を中心に考察することが、本研究の当初の目的であった。まず、未だ全体像が明らかではない 1）クレイグ自身の人形劇研究、および 2）彼の人形制作と人形劇台本、について分析を進めることとした。次いで、3）クレイグの直接的な影響を受けた、チューリヒの国際演劇展（1914）および「チューリヒ・マリオネット劇場」について、モダニズムの人形劇全体を視野に入れながら考察を進めようとした。上述のように、クレイグの「超マリオネット」の構想は、演劇改革のみならず、「人形劇ルネサンス」にも大きな影響を与えた。本研究は、クレイグの人形劇研究や人形劇台本の分析を通してその意義を具体的に明らかにしたいと考えた。また、これまで知られていないクレイグと日本の人形劇との影響関係を調査することで、演劇史・人形劇史・東西文化交流史にも貢献できる可能性があると考えた。

３．研究の方法

クレイグの人形劇に関する研究は、まだ基礎資料すら十分に揃っていない段階である。現地に行かなければ閲覧できない資料も多いため、本研究では資料調査を重視し、早稲田大学、フランス国立図書館、チューリヒ造形美術館、チューリ芸術大学、ドイツ文学資料館等で、クレイグおよび人形・人形劇に関する調査を精力的に行った。先行研究から、クレイグは日本の人形劇（特に文楽）に関心を持っていたと考えられるので、その点に関しても調査した。その結果、思いがけない成果が得られることになった。

1）平成 26 年度は、クレイグ主宰の雑誌“The Mask“ および“The Marionette“ から人形・人形劇に関する記事を抜き出して、クレイグの人形劇に関する思想を調査した。また Patrick Le Boef (ed.): Craig et la Marionette (2009)等の研究文献を読み込むこととした。また国内外の調査を行った。ドイツ語圏のモダニズムとクレイグとの関連について、多くの資料を入手することができたが、それ以外に、クレイグと日本との関連を証明する資料を見つけ出すことができた。前年度までの研究の成果と合わせて論文１件を発表した。

2)平成 26 年度の調査を踏まえ、平成 27 年度には研究計画を少し変更し、ドイツ語圏モダニズムにおける人形劇ルネサンスに関する資料収集は進めつつ、並行して、クレイグと日本文化に関連する資料の発掘に努めることにした。当初の予定通りチューリヒ造形美術館およびチューリヒ芸術大学で調査を進め、貴重な資料を入手することができた。クレイグと日本文化、特に文楽との関連に関しては、引き続き、国内外の図書館・資料館で調査を進めた。またこれまでの調査結果をまとめて、論文１件を発表した。

3)平成 28 年度は、ドイツ文学資料館等で、引き続きドイツ語圏の人形劇ルネサンスについて調査を行うほか、これまで得られた資

料を分析して学会及び論文投稿による成果発表を行った。学会発表１件のほか、論文５件が発表済みないしは、掲載が決定している。

４．研究成果

論文⑦は、クレイグが編集した稀覯本である雑誌『マリオネット』に、江戸時代の画家松好斎半兵衛による『劇場楽屋図会拾遺』（1802？）から、19 枚もの図版が印刷されていたことから出発して、この図像の伝播経路を辿り、日本、ヨーロッパ（イギリスおよびドイツ）、アメリカ合衆国にまたがるモダニズムとジャポニズムのネットワークを明らかにした論文である。またクレイグと野口米次郎の文楽論における相互的影響関係についても論じた。本論文は高い評価を受け、⑦を元にした英語論文①がドイツの学術誌に掲載されることが決定している。

論文⑥は、⑦で論じたクレイグと野口米次郎に関するトピックをさらに発展させ、野口とクレイグの交流の様相を、初めて具体的に明らかにした。

まず、野口米次郎からクレイグに宛てた２通の未公開書簡を、原文および日本語訳で初めて発表した。

また本論文では、野口からクレイグに宛てた献本や、その他クレイグが所蔵していた文楽関係資料についても論じている。なかでも、主宰誌『マスク』において、クレイグが野口から献本された『日本におけるラフカディオ・ハーン』（1910 初版）の書評を掲載していること、この中の一章である大谷正信にかんする章が、丸ごと転載されていることを指摘し、野口の著書が、クレイグにおけるハーン受容に影響した可能性について論じた。ともに英米圏の象徴主義を背景として出発した両者の美学には、沈黙を重視するなどの共通点がある。

また、クレイグは、のちの著書『人形と詩人』において日本の文楽について論じる際、野口の英文記事とともに、日本の絵葉書を参考にしているが、その際に参考にされたと思われる絵葉書について、資料調査の結果を詳しく報告した。

論文⑤は、本論文が初めて明らかにした、坪内士行からクレイグに宛てた未公開書簡の内容についての調査報告である。士行がイギリスに滞在していたのは、1911 年から 1915 年にかけてであるが、この間の士行の活動については、ローレンス・アーヴィングの劇団での活動のみが知られていて、クレイグとの交流にも注目されたことはほとんどなかった。本研究が、未公開書簡を明らかにしたことで、日本およびヨーロッパのモダニズム研究、および東西文化交流史の研究に大きな貢献ができたと考えている。また論文④は、⑤の原資料を翻刻したものである。この二つの論文は高い評価を受け、英語論文②としてまとめ直した上で、ドイツの学術誌に掲載されることが既に決定している。

論文③は、これまでほとんど検討されることがなかった、クレイグの近松受容について、その政治的・歴史的・文化的背景も視野に入れて論じた論文であり、学会発表①に基づいている。クレイグの有名な論文「俳優と超マリオネット」（いわゆる超人形論）と比較することで、クレイグの文楽および近松受容が、人形の祭祀性および媒体性という観点から理解できることを明らかにした。

以上のように、本研究では、当初の予想をはるかに超えて、これまで知られていなかったクレイグと日本の関係について多くの新事実を明らかにすることができた。この点については、さらなる考察を進めたいと思っている。なお、当初目標に掲げていた、クレイグと「チューリヒ国際演劇展」、「チューリヒ・マリオネット劇場」については、資料調査の結果貴重な資料を得ることができたが、まだわからないことが多く、論文をまとめるには至っていない。ドイツ語圏とクレイグとの関係について、補足的な資料収集と資料の読み込みを進め、引き続き検討する必要があると考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　　7 件）

① Yoko Yamaguchi: “Edward Gordon Craig and the International Reception of Bunraku: Transmission of the Puppet Images in Gakuya zue shui, and the Networks of Modernism between Japan, Europe and the United States”（仮題）, *Forum Modernes Theater*, 28(2), 2017（掲載決定）、査読有

② Yoko Yamaguchi: “Shiko Tsubouchi’s Unpublished Letters to Edward Gordon Craig”（仮題）, *Forum Modernes Theater*, 28(2), 2017（掲載決定）、査読有

③ 山口庸子「エドワード・ゴードン・クレイグの近松論―「俳優と超マリオネット」との比較に基づいて」『演劇学論集　日本演劇学会紀要 64』、査読有、2017 年。（印刷中）

④ 山口庸子「坪内士行のエドワード・ゴードン・クレイグ宛て未公開書簡―翻訳と原文」『言語文化論集』（名古屋大学大学院国際言語文化研究科）、第 38 巻第 2 号、2017 年、査読無し、133－155 頁。

⑤ 山口庸子「坪内士行とエドワード・ゴードン・クレイグ―未公開書簡に見る東西演劇の文化接触」（調査報告）、『演劇学論集　日本演劇学会紀要 62』、査読有、2016 年、81-91 頁。

⑥ 山口庸子「エドワード・ゴードン・クレイグと野口米次郎―クレイグへの献呈本とその内容、クレイグ宛書簡、文楽関係の記事および絵葉書」（調査報告）、『演劇学論集　日本演劇学会紀要 61』、2015 年、査読有、59-76 頁。

⑦ 山口庸子「エドワード・ゴードン・クレイグと文楽―『楽屋図会拾遺』の図像の伝播と日米欧モダニズムの国際的ネットワーク」『演劇学論集　日本演劇学会紀要 59』、査読有、2015 年、1-18 頁。

〔学会発表〕（計　　1 件）
①山口庸子「エドワード・ゴードン・クレイグの文楽関係資料および近松受容」2016 年度日本演劇学会全国大会（大阪大学、平成 28 年 7 月１-3 日、発表 3 日）

６．研究組織
(1)研究代表者
山口庸子（YAMAGUCHI YOKO）
名古屋大学・国際言語文化研究科・准教授
研究者番号：273201